

## 3. 采女城の沿革

### 采女城の位置

鈴鹿山脈の麓宮妻峽を源にして、東に広がる水沢扇状地をえぐって流れ下った内部川は河口から約 8km の地点で鎌谷川と足見川を合流して、塩浜の先で伊勢湾にそそぐ。三川が合流するあたり一帯は古くから三重郡五郷のひとつ采女郷とよばれ、古代の東海道が通る交通の要衝であった。采女の名は古事記の雄略記にみえる三重の采女にまつわる故事に由来すると伝えられ、壬申の乱で、吉野を脱出して美濃に向かう途中に大海皇子が小屋を焼いて暖をとったとされる三重郡家はこの地にあったとされる。

合流する内部川と足見川に面して采女の地を眼下に望む泊丘陵の一角に采女城の遺構が残っている。一帯は標高 50m～70m の丘陵地で、小さな谷や尾根筋が複雑に入り組み、南と西には内部川と足見川が流れて城の守りとなっている。

### 采女城主後藤家の由来

采女城の城主は後藤家であったことは江戸時代の『三国地誌』（藤堂元甫 宝暦十三年 1763）をはじめとする地誌に記されている。後藤家の子孫は平成の中頃まで活動した内部郷土史研究会により所在が明らかとなり、家に伝えられた家系図には築城の委細が記されている。

采女城主であった後藤氏は、藤原家の流れをくむ河内の武士で、代々源氏に仕え、前九年の役の武将で鎌倉に鶴岡八幡宮を建立した源頼義配下の七将の一人であった。後藤実基の時、その子基清とともに平治の乱（1159 年）、屋島の合戦（1185 年）に活躍し、平治物語・源平盛衰記・吾妻鑑に登場している。子孫は鎌倉幕府に仕え、六波羅評定衆や検非違使に就いて幕府運営に携わり、守護・地頭に任じられるなど幕府初期の有力御家人であった。

### 采女城築城

こうした中、後藤氏による采女城築城については後藤家に伝わる系図に委細が記されている。それによれば、鎌倉時代中期の「文応元年（1260）後藤基秀の時先陣に加わり功あり、伊勢の国三重郡采女郷の地頭職に任ぜられ、一族郎党を引き連れて采女の地に入り宇野部山（采女山）に城を築いて住んだ」とある。ただしこれを証する文献は他に見当たらず、後世の地誌（布留屋草紙・伊勢名勝誌ほか）では実基と基清の名を挙げている。

その後の後藤氏（家）動静を伝える文献は少なく、鎌倉幕府の滅亡から南北朝時代の動きを記した『太平記』や戦国時代の伊勢国の動静を記した『勢州軍記』などの軍記物にその名が断片的に登場していることから、北勢四十八家といわれた北勢四郡（三重郡・朝明郡・員弁郡・桑名郡）の北方諸侍の中にあつて、勢力を維持し采女七郷を治めた。

### 北勢四十八家と中世城館跡

室町時代から戦国時代にかけて北勢地域には土豪をはじめとする地侍の城館が多数存在し、采女城もそのうちのひとつであった。鎌倉時代に幕府によって全国に配置された守護・地頭は、室町時代以降になると荘園体制の崩壊とともに在地領主化し、各地に城館を築いて領国支配をはじめた。伊勢国では南勢五郡は北畠家、中勢四郡は関家と長野家（工藤家系）の支配下にあつたが、北勢四郡（員弁、桑名、朝明、三重）では中小土豪が林立し北方諸侍とも北勢四十八家ともよばれた。

後藤家は南北朝時代には北畠国司の家臣団に属し、16世紀に入って近江六角氏の勢力が北伊勢に及んでくるとその傘下に属した。

土豪の築いた城館は現在では中世城館と呼ばれ、その跡地は北勢四郡で150か所に上という。これらの城は多くは河川添いの高台や交通の要衝に築かれ、四日市市域には30か所がある。内部川沿いには、水沢城（水沢字東条）・城の山城（水沢町字東条）・山田城（山田町字吉ヶ原）・采女城（采女字北山）・小古曾城（小古曾五・六丁目）・川尻城（川尻町字古城）の6城がある。（城館跡名および所在地は『四日市市史第4巻資料編文化財』）

## 采女城落城

やがて織田信長・豊臣秀吉が登場し戦国時代の終わりを迎える。各地の土豪衆は信長の天下統一に向けた調略や戦闘により、臣従するかあるいは滅ぼされていった。采女城を含む北勢四十八家といわれた北勢の土豪衆の城館はすべて絶え、城館跡と伝承を残すのみとなっている。鎌倉時代から300年続いた後藤家采女城もこの波にのまれて落城した。しかし采女城落城に関しては後藤家の系図には記録がなく、江戸時代以降の地誌が諸説を伝えている。そのうちの一つに、采女城は織田信長により滅ぼされたとする説がある。

信長は京都上洛に先立って伊勢国の平定に取り掛かり、永禄11年（1568）から12年にかけて4度にわたり伊勢に侵攻した。地誌の記述によれば、この侵攻によって四日市市域にあった30城のうち13城が織田信長により滅ぼされている。采女城を記した『布置屋草紙』によれば、「十五代采女作但馬守に至り永禄十一年（1568）信長と戦ひ落城す」とある。しかし永禄11年に織田信長に従い高岡城を攻略したという他の記述もあり、また永禄13年には後藤采女正が加富神社の社殿を造営したとする棟札も残っているなど、永禄11年落城説と矛盾する記述もある。

他に元亀3年（1572）、天正2年（1574）、天正18年とする説もある。このうち元亀3年説は「亀山の関盛信がその所業を信長に咎められ、勘当を受けた。これにより関家の与力（味方）であった後藤家をはじめとする16家の侍が神戸信孝（信長三男）に付くか浪人した」というものである。この時後藤家は浪人した、すなわち落城ではなく城を追われたというこの説は天正2年・18年説よりも信頼性があり、采女城落城説中では可能性は最も高い。

とはいえ、戦闘による落城説は根強く、江戸時代に記された多くの地誌には近隣の多くの城と共に織田信長により滅ぼされたとの記述が残されている。地元には城主後藤藤勝は落城の時割腹して果て、その際千奈美姫が井戸へ身を投げて死亡したと伝えられ、後世の人はこの古井戸から夜な夜な女のすすり泣きが聞こえてくると語り伝えられている。

## 采女城ゆかりの史跡・地名

波木町の足見川添いの丘陵地に建つ加富神社は采女城主後藤家が2代にわたって社頭を造営している。采女町の成満寺は後藤家の菩提寺として昭和53年（1978）に采女公五百年遠忌法要を営んでいる。真慧上人が北小松に建てた中山寺は後藤采女正との諍いにより焼失し、のちに弟子が南小松に再建した。北小松の跡地には石碑が建てられている。ゆかりの地名としては、波木町には御苦勞（城の番士が交代時に御苦勞と声を掛け合った）、的場（弓の稽古場）、なこの坂（落城時に兵士が泣きながら逃げた）が伝えられ、采女城のある北山の隣に位置する森ヶ山には矢矧（矢を作ること）の地名が残っている。

（この項は『采女城主後藤家の興亡』より引用した）

付図1 郡郷想定図 (朝明郡・三重郡)



采女七郷 (『三國地誌』)

采女・杖突・古市場・清水・小松・羽木・貝家

以下の説もある(秦茂一著『采女の歴史』)

采女・波木・貝家・北小松・南小松・東山・今宿

三重郡五郷 (『日本歴史地名大系 三重県の地名』)

采女郷・河後郷・葦田郷・柴田郷・刑部郷

采女郷・河後郷・葦田郷・柴田郷・刑部郷

付図2 現在の内部地区(平成20年代)と采女七郷

